

浄土教とキリスト教

——方法論的視座より——

「比較思想とは何か」という問いに対しては、これまで、東西の思想を比較してその類似点と相違点を明らかにする学的営為である、というのが、一つの典型的な答えであったといえる。

その場合、だいたい従来成立している領域別に、東西の哲学思想、東西の倫理思想、東西の宗教思想等々に關して比較思想が遂行された。東西の宗教思想の比較という場合、まずもって仏教とキリスト教、とりわけ浄土教とキリスト教が取り上げられるのがつねであった。その理由は、世界宗教としてまだイスラームにあまり知識と関心が集中しなかったこと、東洋といえは仏教、西洋といえはキリスト教であって、同じく仏教といっても自力的な禅仏教ではなくて他力的な浄土教がキリスト教と比較の組上にのぼるのである。

このようなことがこれまでの比較思想の一つのパターンをなし

ていたといえる。しかし、このパターンには問題化すべきことが含まれている。大きくいえば、イスラームを取り上げればどうなるか、という問題がある。立ち入っていえば、「東西思想」という前提としての東洋と西洋の概念についても吟味することが求められる。キリスト教の発生地がオリエントであることを指摘するまでもなく、そもそも東洋と西洋という枠組みそのものが再検討を求められるのである。

浄土教とキリスト教についていえば、浄土教における念仏とキリスト教における祈り、前者の念仏の対象としての阿弥陀仏、後者の祈りの対象としての神、前者の罪惡深重の凡夫觀、後者の原罪から免れられない人間觀、三身説における報身としての阿弥陀仏と三位一体説におけるイエス・キリストの位格など。これらの諸点がこれまでしばしば論議されてきた。つまり、浄土教とキリ

峰 島 旭 雄

スト教における救済観、仏身論・神観、人間観などである。このような比較もまたパターンをなしてきたということが言える。

しかしながら、現時点においては、このようなパターン化した比較を超えて、新しい比較の地平が開かれなければならない。その方向性について少しく述べよう。

まず、東洋と西洋という枠組みそのものが問題化している現在、われわれはどのように振る舞うべきであろうか。一つには、もう一度、現下で可能なかぎりの東洋・西洋の枠組みをつくり直すことである。しかし、もう一つ、これまでの東洋・西洋の枠組みに拘束されない、新しい枠組みを提起してみたい。それは「私の中の東洋と西洋」ということである。私、つまり日本の現在の精神的状況においてある私の中には、すでに一種の精神的伝統としての東洋と西洋があると言える。つまり、外からの客観的な所与を手がかりとして比較をおこなう（これが一般に学的に厳密な比較といわれる）のではなく、内から自覚的・内省的に比較をおこなうのである。その場合、もとより、学的厳密性をどのようにして保持するかが問題となるであろう。

次に、東洋と西洋、かつ仏教ないし浄土教とキリスト教というこれまでのパターンの中でおこなわれてきた救済観・人間観等の比較についてであるが、それらに関しては、比較の固定した単位というのではなく、N・スマートのいう「然り糸」strandの概念を私なりに解釈して用いたい。スマートによれば、例えば、仏

教とキリスト教に通底して、礼拝 worship とか受肉 incarnation などのありようが見出される。これらをもって比較するのである。この「然り糸」という概念は、「ねじり合わせ」「組み込ませ」を意味するから、それぞれの比較の対象の中にモザイック的な要素としてあるのではなく、ダイナミックに、かつフレキシブルに捲き込まれているのである。本題においては、このような視座から、浄土教という報身としての阿弥陀仏とキリスト教においてそれに対応すべきもの、および、キリスト教でのイエス・キリストの磔刑と浄土教におけるそれに対応すべきもの、について若干考察をほどこすことにしたい。

また、「比較を超えて」という視点からは、現代における宗教多元主義に触れざるをえない。本シンポジウムにおいて、この点に触れる提題が多いが、ここでは、あくまで「比較を超えて」の視点から述べてみたい。宗教Aか宗教Bか、あるいは宗教Aを採れば宗教Bは排除されるという時代は終わったとされる。宗教AにはAの存在価値（信仰すべき価値）があるとともに、宗教BにもBの存在価値（信仰すべき価値）がある。両者は全くかけ離れているか、重なり合っているかを問わず、一人の信仰者から同時に認められてよい、あるいは他の信仰者によって信ぜられてよい、という傾向が増大している。二つ以上の宗教の併存である。それは多値、多文化を認めようとする時代の趨勢を反映していると言える。唯一絶対神を信ずる場合でも、これまでのように、ただち

に他のすべての信仰の立場を排除するのではなく、そのような絶対的信仰をもちながら、他の諸信仰をも認める寛容がそこにある。しかしまた、逆にいうと、宗教多元主義は宗教一元主義の可能性をもっている。この場合の一元主義というのは、いずれか一つの宗教へと他のすべてを統合してしまうというようなものではなく、いま述べたような、他をも認める寛容さに見られる共通性の是認、あるいは是認の共通性である。したがって、少なくとも現象面では複数の諸宗教が成立しながら、しかもそれらを通じて共通の是認（その場合は相違を承認しながらの）が一元的に共存するのである。

そして、この一元的に共存するレベルがどこであるかによって、ここでいう一元主義も様相を異にするし、したがってまた多元主義の捉え方もまた異なってくるのであろう。そのレベルとは、たとえば、P・ティリッヒのいうごとき「究極的なもの」のレベルを考へることもできよう。ティリッヒにおいては、この「究極的なもの」を深みとしてそこから科学・芸術・道徳という文化の諸分野が成立するのであるが、ここでは、このような「究極的なもの」、つまりは「宗教的なもの」を深みとしてそこから多元的な諸宗教が存立していると考えるのである。「宗教的なもの」といえばJ・デューイの“the religious”を思い合やすことができる。デューイは“(a) religion”、すなわち歴史的に成立し制度化された宗教に対しては否定的であったが、人間の心にそなわる「宗教

的なもの」に対しては肯定的である。キリスト教は現段階においてさまざまな夾雑物を堆積しているが、開祖イエス・キリストにおいては「宗教的なもの」が埋没されずにあったと認めている。

多元をなす個々の宗教は、みずからの根源としてのこの「宗教的なもの」をつねに思い、そこからの由来を大事にしなければならぬ。そのためにはたえず源泉へたちもどり、そこから力を得てくるものでなければならぬ。力とは、個々の宗教としてのドグマに凝り固まるのを防ぎ、生命を吹き込むことにはかならない。しかしまた、その反面、個々の宗教が普遍的な宗教、ある意味では砂上の楼閣のごときものになってしまうといけない。個々の宗教はそれ自身としての独自性と、絶対にゆずることのできない核 core をもたなければならぬ。浄土教でいえば、「現世をすぐべきようは、念仏の申されんようにすぐべきなり」（法然）であって、究極のところは、念仏が申されるようにしなければならない。念仏が核であり、尺度なのである。

そのような念仏が浄土教の核であり、独自性であり、絶対にゆずることのできないものであるならば、かの「宗教的なもの」とどのようになるであろうか。核としての念仏は「宗教的なもの」からすれば、一つのドグマティックなものとみられるのではなからうか。けれども、念仏が真の意味で核たりうるためには、「宗教的なもの」に根ざしたものが浄土教という個々の宗教の中に核となつて、いわば噴出したものが念仏であらねばならない。

このような例は、キリスト教においても見出されるであらうか。近代神学のシュライエルマッハーは、やはり「宗教的なもの」を前提とし、その核心に「神学的なもの」を見、さらにその核心に「キリスト教的なもの」を見た。（『神学通論』）この「キリスト教的なもの」が「絶対依存の感情」であることは、あらためて言うまでもない。（『キリスト教信仰論』）

最後に要約して、えは、比較方法論の視座より、「浄土教とキリスト教」の問題を、しかも「比較を超えて」扱うには、まず自覚的に比較者自身が主体的にかかえている浄土教のないキリスト教の問題を捉え、もとより外部に所与としてある浄土教のものとキリスト教のものと交叉させ、とくに後者については学的・客観的に追究する。さらに、これまで問題として取り上げられてきた問題群を、比較の要素的単位としてでなく、strandとしてダイナミックに捉えることを試みる。個々の宗教と「宗教的なもの」とをいわば垂直的にかかわらせ、「根源へ」と「根源から」の一種の dialectic によって、それぞれの宗教（ここでは浄土教とキリスト教）の存立性を基礎づける。

かくして、比較は比較に終わらないことを確認することになる。比較は一般に相対化である。しかし、比較が遂行されるとき、そこには単なる comparative を超えた superlative が追究されているのでなければならない。（本学会創立大会シンポジウムにおける片山正直博士の主張、参照）そのような理念を求めてわれわ

れは比較をおこなう。そのことが相対化としての単なる比較を超えて、ある意味でさらに比較を深めることになるとも、言えるであらう。

*実際のシンポジウムの提案に際しては、右の考えを基調としながら、ヤン・ヴァン・ブラフト南山宗教文化研究所所長のきわめて率直かつ鋭利な問題提起（『浄土教とキリスト教——宗教における救済と自覚』同上研究所編、一九九〇年、の「オリエンテーション」に従い、提題者としての主張を提示した）。

（みねしま・ひでお、比較哲学・宗教哲学、

早稲田大学教授）